山形南高（山形二中・二高）東京同窓会報

第八号
平成23年11月5日発行
発行人　千代田区平河町2―6―3
山形県東京事務所内
山南東京同窓会事務局
斎藤　常男
編集人代表　小松　栄三郎

結束して進もう！

山形南高東京同窓会
会　長　斎藤　常男

始めに、東日本大震災により亡くなられた方々に、追悼の誠を捧げると共に、ご遺族並びに被災された皆様に、心よりお見舞い申し上げます。東北は歴史的に不遇と不条理の中で、黙々と生きてきました。日本の発展を支えてきました。東北人は、「負けてたまるか」という東北力を持っていますが、この力で立派に復興します。「負けないぞ」と進んで行ってください。皆さんは凄い力を持っているのです。

1　東京同窓会の建設に先輩の力

ゼロからスタートした東京同窓会は、規定の整備、財源の確保、運営と活動方式、総会や会報発行の仕方など、様々な点で想像力と知恵を必要としていました。社会経験の豊富な先輩の方々に役員に就任していただき、立派な仕事をしていただきました。これまで、渡辺、森谷、椿、土屋、加藤、吉野、浅黄、江口、鈴木（敬称略）、県の方々から、大きな力をいただきました。

心からお礼を申し上げます。

2　東京同窓会は「心の故郷」

大都会で働いていると、孤独感が強くなってきます。加齢に従い、故郷や父母、友人や母校を想い出すことが多くなります。そして、自分の「心の故郷」はどこだろうか、と考えるようになります。人それぞれですが、青春という多感な時代を過ごした「高校3年」が我々の「心の故郷」ではないでしょうか。暗い時代にあって、「心の故郷」を持っている人は、幸いなりであります。東京同窓会は、皆さんの「心の故郷」になるよう建設を進めて行きます。

3　山形力で東京同窓会の発展を！

いま大震災により、東北が評価され、脚光を浴びています。我々は、東北力と山形力を持っています。山形力とは、ねばりと困難に立ち向かう黙々とした強い力であると思います。「負けてたまるか」「負けてはならない」という敢闘精神が底流にあることであります。

我々は、山形力の良さを自覚し、東京同窓会の活動を進めていけば、会員の期待に応える「会」になっていくと思います。

結束して進んで行きましょう！

ご協力に感謝
七十周年事業完遂

山形南高同窓会
会　長　佐藤　充彦

山形南高東京同窓会の皆さん、ご壮健でご活躍のことと拝察致します。

会長就任以来1年6ヵ月、各地域、各職場の南高会、コバルト会に出席し、同窓会に対する意見を聞いて回わりました。改善すべきは改善し、若い会員たちが多く参加出来るような同窓会を目指して行きたいと考えております。

１９４１年、昭和16年に山形南高の前身、山形二中が開校して今年は70周年の記念すべき年でした。同窓生の皆様には、記念事業遂行のために募金をお願いしましたところ、各学年単位で納入して頂き、感謝申し上げます。70周年記念事業の中心はグランドの拡張整備でしたが、弓道場の移築を含めて、予定通り事業を完遂することが出来ました。事業にご理解を頂き、協力いただいた同窓会員諸氏に敬意を表したいと思います。

東日本を襲った大震災では、在校生たちが直ちに避難所へ物資を運搬。直接被災地に入ってガレキの処理に汗を流し、同窓会も募金活動を展開しました。この行動力は、まさに伝統の「南高魂」だと思います。とくに福島で起きた原発事故は、原爆で甚大な被害を受けた広島、長崎に次いで66年ぶりの放射性物質の放出であり、我々は長期にわたる支援を続けて行かなければならないと思います。

南高70年の歴史を遡るとき、その原点には戦中、戦後の混乱の中で、学校創りに邁進する先輩たちの姿がありました。そこで培われた固い結束が団結心の強い同窓会の基盤となったのです。

東京同窓会の益々の発展と会員各位のご健勝を祈念申し上げ、挨拶と致します。

ご挨拶

山形県立山形南高等学校
校長　布川　元

東京同窓会の諸先輩方には、日頃より多くのご支援を賜り心より感謝申し上げます。特に昨年は、東京同窓会よりテントをご寄贈いただき、また東京同窓会長の斎藤常男様からは大型デジタルテレビをご寄贈いただきました。誠にありがとうございました。

さて、6月22日、本校生徒会は東日本大震災復興支援活動が高く評価され山形市青少年市民会議より表彰されました。本校では、3月11日の大震災直後から「今、社会のために私達が出来る事を成し遂げよう」を合言葉に、全校挙げて支援活動に当っております。たまたま災害に遭遇しなかった私達が、あまりにも突然の不幸に見舞われた方々を支援しないではいられない。生徒達は、高校生として何が出来るかを考え、募金活動や避難者支援、得意分野を生かしたチャリティなどを行いました。サッカー部・バレーボール部・合気道部・新聞部の生徒達は石巻や名取まで出かけて復興支援に当りました。6月3日には吉村県知事を訪問して支援活動を報告し、ねぎらいと激励の言葉をいただきました。

復興支援ボランティアを通して『知行合一』を実現させたい。それが、文質彬彬とした社会のリーダーを目指す南高生の学び方であり、まだまだ続く復興支援を良きケーススタディとしてこそ、犠牲者の無念に報いられると考えています。ご理解賜れば幸いです。

結びに、山形南高東京同窓会の多くのご支援に深く感謝致しますと共に、本会の益々のご隆盛をご祈念申し上げ、挨拶と致します。

同期会活動紹介

「あこや会」の名前で再スタート

南高3回卒　吉野　禮三

発足時から東京の同期会の名称は「東京二八会・ふたば会」の二つの会の共催という形をとってきました。戦後の混乱した文教政策の不手際からこうなったもので、曰く因縁は省略するとして、山形の同期会も高齢化等の事情から、「山形二八会」は昨年をもって長い歴史を閉じてしまった。毎年事情の許す限り押しかけていたので、大変残念だ。関東地区でも、同期生の集まりの出席者が固定化し、いわゆる「常連」が定まってきたので、この際、100人を超える全会員をお世話する仕事はそろそろ勘弁してもらい、すきな時に随時集まろう、と提案したところ、皆さんの総意で有志を募り常連さん中心で再出発することにした。

一応、新しい名前をつけて気分転換を図ろうと、故郷山形のシンボルは千歳山、千歳山といえば「あこや姫」というわけで、会員の半数が女性であり、「あこや会」案に異論を差しはさむ余地はなく、即座に決定。

同窓会の皆さん、そんなことで、「あこや会」は女学校の同期会と誤解しないで、今後ともご厚誼のほどよろしくお願いいたします。会員総数32名、内幹事会メンバー（いわゆる常連）21名であります。

早いもので南高を卒業して58年になる。数年前、地元から「喜寿を祝う会」をやろうじゃないかと相談を持ちかけられ、それならいっそ、入学時は一緒でも、西高を卒業ということになった女子にも呼びかけたら、と囁いたら、大きな輪ができた。

昨年5月23～24日、会場は葉山温泉の「古窯」、参加者約85名、東京からも10名ほど。実に盛会だったが、見覚えのない女子多数あり、58年間の断絶はいかんともしがたいのだ。

東京勢は勝手に？全員登壇し、千場君作詞「ふるさと山形」を即席でご披露。出席者全員で故郷に乾杯と歌ったが…こんなこともこれが最後だな。

翌日は山形の友人も加わり、二位関君推薦の「タガマヤ村」―昭和レトロな古民家と蔵―を丸ごと貸し切り一泊した。プロデューサーの半助さんは南高の後輩とわかって意気投合。女性の先輩がいたのに驚き酒宴に飛び入り、「空をコバルト」が村山の田圃に響き渡る。

孫でも連れて帰省の折は、半助プロデューサーの携帯090-9437-1569へどうぞ。

昨年九月には、東京二八会の創立者の一人中井川君が、10月には、山形二八会の会長や同窓会の副会長をやった前田君が逝った。喜寿の会で、前田君が小生の傍から離れず、会の進行を見守っていたことが忘れられない。東京の同期会にも来てくれ、飲み明かしたのも同期生皆の胸の中に生きている。

今年に入って、東京同窓会の学年幹事の常連で紅一点の藤井千代子さんが急逝した。南高・成蹊大学時代はバドミントンで全日本に出場し、社会人になってからは幼児教育の功労者として、また同期会の宴会部長として大いに座を盛りたててくれ、皆から〝千代ちゃん〟と慕われた。元気者だから「あこや会」の発会式には必ず駆けつけてくれると全員が

待望していたが、もうしばらく時間が欲しかった。

日本のマスコミに紹介してもらおうとは、だれも思わないが、同期生は実に多士済々である。是非私が文春の編集長になったつもりで、いずれご紹介したいと思っているが、今回は昨年の総会の折の写真を見ていただくことにしたい。以上。

創立七十周年記念事業 大応援団旗贈呈

南高6回卒・六南会事務局　江口　光夫

本年、山形南高は創立七十周年記念の年を迎えることとなりました。わが六回生は、平成9年5月、還暦を記念して南高健児の象徴「大応援団旗」を寄付いたしました。

あれから13年を経過、鮮やかなコバルトブルーの色も変わり、はためく生地も剥げ落ち、在校生の汗の結晶と相まみえる壮烈な旗に変わっておりました。

「六回生の手で、もう一度大応援旗を贈呈しようではないか。」との話が持ち上がり、六回生の佐藤光彦氏が同窓会長に就任したこともあり、全面的に協力支援しようと、昨年の4月、六日会・六南会の役員会で承認を得、さらに5月のそれぞれの総会で承認を得、「創立七十周年記念事業及び大応援団旗贈呈実行委員会」を立ち上げました。

昨年11月に210数名に「趣意書」を発送。絶大なご協力を頂き、賛同者140名近く、110万円を超える募金を集め、目標額を達成、あらためて六回生の「絆」の強さを示す事が出来ました。

大応援団旗と事業推進事務費など清算を終え、一時京都で製作・納品された大応援団旗は、南高校長室に保管を依頼し、10月24日の創立記念日に「旗開き」・お披露目されました。

平成23年度「六南会」総会・懇親会は、山形「六日会」から五十嵐会長・山田幹事のご出席を頂き、総勢27名「銀座アスター本店」に集合し、七十周年記念事業・大応援団旗経過報告と協力支援に感謝を表明。昨年発刊した「六日会・六南会会報」は、全国各地の六回生からの近況報告や趣味の披露・お祝い・不幸などの情報ツールとして、大いに役立ってくれています。

最後と思われますが、「六日会・六南会合同芋煮会」を10月に実施しました。

卯年の「ミミの会」活動報告

南高8回卒　牧野　靖信

「卯年生まれは、世辞と愛嬌がある故に、人気も有りて福徳あり。」と言われ続けて72年、未だ達成感に乏しく、福徳を求め続けているミミの会であります。

卯（ミミ）の年に、卯年生まれがミミの会（33年卒）の33（ミミ）回目の例会を計画するにあたり、この位ミミ（卯・33）が重なれば、何事やあらんと期待したのであります。

その例会は、二月の第2日曜日、伊東温泉のホテルニュー岡部で開催されましたが、例年にも増して出席者は少なく、13名でありました。歳故か勢い無く、定番であった前夜祭は随分前に行われなくなり、二次会も今回は井戸端会議並に、稲穂が垂れるが如く品行方正な夜でありました。

翌日は、伊東マリンタウンに向かい、遊覧船に乗り、湾内の海底をのぞき、短時間ながらもクルージングを味わいました。

33年前の昭和54年2月、箱根湯本の和泉旅館に於いて、東海林宏を発起人として誕生して以来、現会長は三代目で山田勲が務める。山田会長は、年に3回くらいの頻度で、"みみより情報"を会員に配信する。母校部活の応援、南八会の催し、あるいは旅行、散策また納涼会、忘年会等が掲載されている。

今年二つ目の行事は、"お台場散策・日本科学未来館見学と銀座納涼会"でした。日照りの続く、7月16日昼過ぎ、節電か経費節減か、少々混み合って、蒸し暑いゆりかもめに乗り、お台場へ。ニューヨーク旅行よろしく、自由の女神前で記念写真。涼を求めてアクアシティを経て、未来館に入る。HⅡAロケットエンジン、しんかい6500等の展示物を見、脳の大きさのお勉強を済ませ、

うおや一丁に向かう。
狭いテーブルに沢山の肴、ビール、焼酎、日本酒が並ぶ。瞬く間に、皆は酔いに酔う。
2時間後山形プラザに向かう。ショッピングをしてもらう事が、この日のコースの、会長が仕組んだ取って置きの心付けであった。

人生の積み重ねを語り合う

南高12回卒　原田　嘉行

山形南高東京同窓会12回同期会の会員は約60名である。同期の集まりは学年幹事の毛利、市村両君の呼びかけによって行われてきた。打ち合わせを口実とした飲み会から始まった。東京同窓会の活動報告や協力依頼に対する役割分担などまじめな話もあるが、それぞれの消息の確認が主となっていて、時には山形の本部で定期的に会合を開催している小松真一代表幹事も駆けつけ、山形の話題を提供してくれる。この様なときは、故郷への思いも募るものである。私は、すべての会合に参加している訳ではないが、この歳になってようやく話せるようになった秘話や悪ガキ時代の思い出、故郷を離れた経緯や苦労話、失敗談や自慢話など、それぞれが積み重ねてきた人生を懐かしい方言を交えながら聞き語りあってきたことに感謝したい。
去る7月16日の新橋での集まりで、東京同期会を9月10日、九段会館で開催することを決めた。皆は「気が置けない楽しい雰囲気の中で高校3年間の記憶が蘇った」「空白が埋まった」との感想が続出し、盛り上がりのままカラオケ二次会へと繰り出した。お開きは元応援団長の尾形充洸君の歳を感じさせない元気なリードで校歌「ひんがしに碧き蔵王嶺～」応援歌「空はコバルト～」を全員で高唱、次回の集まりを楽しみに散会した。

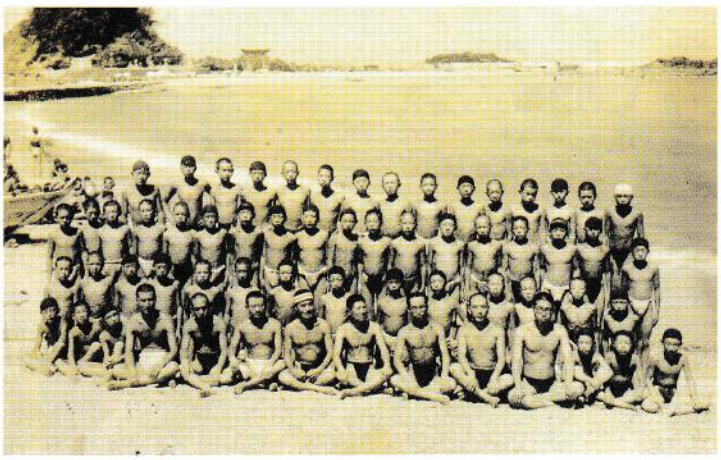
【この記事は、昨年の会報第7号に掲載するはずでしたが、編集の過程で記事と写真が消えてしまい、今回改めて掲載させていただきました。大変ご迷惑をお掛けしましたことを、心よりお詫び申し上げます。記事中の期日等は、昨年のものとご承知ください。】

わが人生を振り返る

軍國少年の海洋訓練
―メタボはいない―

二中5回卒　加藤　忠利

「米國打つべし」「撃ちてし止まん」「ほしがりません勝つまでは」などの標語のもと、大東亜戦争の緊迫した中、昭和19年（1944）1年生の夏に鼠ヶ関海岸に、米持参で1週間、泳ぎを習いに行った時の1年1組の写真です。
湿気が多く、寝苦しく、しかも腹ペコだったが、眞剣に泳ぎに打ち込んだ。最終日には、伝馬船に見守られながら遠泳をした。小生は、小学5年生の時に、既に1500米を泳いでいたので、楽しく泳ぐことが出来た。
修学旅行のない時代に、せめて海洋訓練と称して海に入れてくれたのであらうか。
でも殆どの生徒が、いづれお國のために命を捧げるつもりでいた。
今も心のどこかで、
誇りに思っています。

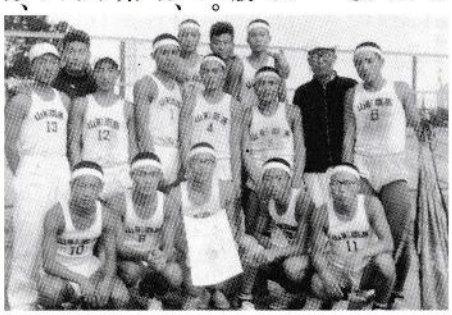


仲間こそ最大の財産！

南高10回卒　尾形　昌広

初めに3月11日発生した東日本大震災の被災地の皆さんに心からお悔やみとお見舞いを申し上げます。
さて、自分ではまだまだ若いつもりでいましたが、今年70歳（古希）を迎えました。これまでの70年間を振りかえってみると、青春時代の中学・高校・大学の学生生活はバレーボール一筋の毎日でした。幸いにそ

の節目ふしめで本当に仲間に恵まれ、中学一年、二年に県大会優勝（山形六中）。高校時代は、全国大会第三位、第八位。大学四年生時には、大学試合全タイトルを獲得し、他に学生初の天皇杯優勝と、一生の思い出に残る幸せなバレー生活、青春時代でした。


山南２年富山国体第３位（本人２列目右から２人目）

これもすべて、素晴らしい仲間と出会った結果で、一生の財産であり、心より感謝しています。

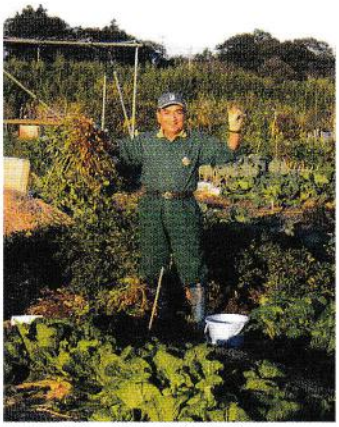
あの時代の南高バレーは、諸先輩に鍛えられた精神面は勿論のこと、技術面でも、六大学及び実業団チームに充分通用し、山南バレー部出身を心より誇としたのでした。

社会人としてのスタートは、昭和39年の「東京オリンピック」の年で、日本国中が湧いていました。高度成長の出発点で、現在の真暗な社会情勢と異なり、明日への希望と夢がありました。職場でも、同期及び仲間に恵まれ、今では良き思い出ばかり。定年後も、毎年2～3回、夫婦5組で旅行を楽しんでいます。

会社をリタイヤしてからの10年間は、現役時代出来なかった「家庭菜園」「山登り」「俳句」に挑戦。また、地元の小学校の「安全管理委員」として、週6日、1日4時間、児童の登下校の立ち合いと、校舎内の点検巡回をしています。

私の健康志向シニアライフの中核は、家庭菜園です。地元のお百姓さんより3か所借地し、面積約90坪をフル活用し、趣味として楽しんでいます。そのうちの1か所では、山南6回卒、バレー部先輩の佐藤忠雄さんと一緒に、情報交換しながら、楽しんでいます。

現在、年間を通し50種類位の野菜を作っています。収穫時までには、いろいろと苦労もありますが、取りたての野菜を家族で食する喜び、更に菜園を通じての畑仲間との情報・物々交換、収穫祭での飲み会等、また近隣の皆さんに野菜を提供する事で、お世辞でも「無農薬で新鮮、本当においしかったよ」と喜んでもらえる事が、生産者として大きな喜びと励みです。地域の人々との交流とコミュニケーションに大きく役立っていると自己満足しています。


H21年秋　我家家庭菜園にて

これからの余生も、「故郷の仲間」「会社の仲間」「地域の仲間」との交流を大切にしながら、健康で楽しい日々を送りたいと願っています。

ふるさとのシンボル

南高12回卒　市村　好廣

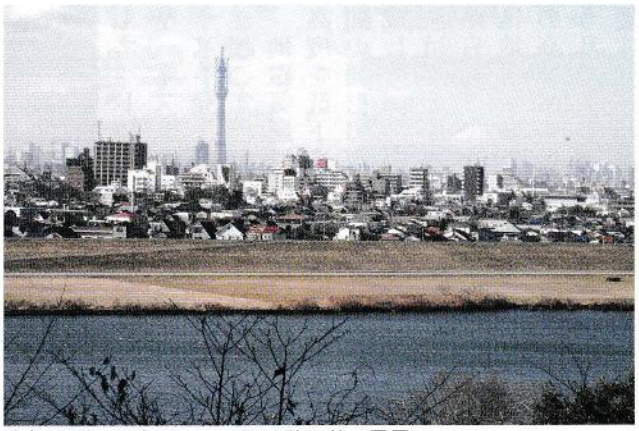
ふるさと山形から上京しそのまま就職、満員の通勤電車に揺られ続けリタイヤとなった。あっという間の50年でしたが、住所もあちこち数回転居し、今は縁あって市川市国府台に住み、娘夫婦と同居して通算17年になります。

この年齢になると、ふるさととは、単に住んだり働いたりの時間が長いということではないとしみじみ思うようになった。生まれ育った家や、近くのお寺や神社、街並みと広場の風景、さらに山や川の自然の中に、利害関係なく思い起こし、感慨にふけることができる所ということだろう。それぞれの人の感性豊かな成長期の印象が、一生を左右するかもしれない。

さて、私は自宅に孫たちと同居しているが、彼らにとっては、この騒然とした雑踏がふるさとなのかと思うと、私の選んだ道とは言え、いささか複雑な心境になる。そこで、シンボルとしてのふるさと探しと、健康維持のため、散歩方々、あちこち探索する日々となっている。

ところで、自宅近くに安藤広重の名所江戸百景のひとつとして描かれた「鴻の台利根川風景」は、戦国時代の南総里見氏と小田原北条氏の古戦場、国府台城跡で、里見公園として整備されている。

その高台から、江戸川越しに建設中の東京スカイツリーが眺められる。あまり知られていない場所ではあるが、最近はカメラ片手の人々のたまり場になりつつあり、タワー開業後ライトアップされたりすれば、さらに風光明媚な風景となり、花見時以外は人影乏しい里見公園も、少しは脚光を浴びるかもしれない。


今年２月、工事クレーン取り外し前の風景

地元から東京下町を眺望していると、今この地が第2の故郷なのかなーなどと思ってくる。石川啄木は岩手山を見て「ふるさとの山に向ひて言うことなしふるさとの山はありがたきかな」と詠んだが、人工的とは言え、これが孫たちにとっての一つの故郷の光景かもしれないなどと思うこの頃である。山形南高の千歳山のように。

New York 世界貿易センター 爆破事件（2）

南高15回卒　滝口　成一

真っ青な雲ひとつ無い空の下、ハドソン湾対岸のニュージャージー州から遠くに見た「自由の女神」像は今でも鮮明に懐かしく思い出すことが出来る。

前号では「9・11テロ」（2001年）でビルが崩壊し跡形も無くなってしまったが、当テロから遡ること8年前の93年2月に発生した「世界貿易センタービル（WTC）爆破」事件に遭遇、難を逃れ命からがら地上に辿り着いたところまでを述べた。

今回はその後を記すが、手元に当時の事件を報じたNYタイムズ紙とあの時を思い出すに足る十分な「スス」に汚れたハンケチを手元に置き、18年前の悪夢を振り返ろうと思う。

私は大混乱の中、運良くWTC・48階から地上へ降りた後、近くのフアイナンシャルセンターへと向かった。既に集合しており、緊迫の中、安否の確認、明日からの対応、情報収集などの会話が飛び交っていた。夕方、私達は宿泊に指定されたセントラル・パーク近くのNYヒルトン・ホテルへの移動となった。

センターを出て地下鉄へ向かうが、道路も駅周辺も、人々や警察で大混雑、地下鉄は止まっており、車の進入が規制されているため、イエローキャブは簡単には捕まらず、やっとの思いでホテルに着いた。フロントで事情を説明し、部屋へ通された。部室に入り、何はともあれ、シャワーを浴びようと・・ト・ところがワイシャツが真っ黒！なんと衣服そのものが、全てが「ススで真っ黒なのである。洗面所にも浴槽にもススが真っ黒にこびり付き、落とすのが大変だったことを今でも思い出す。

翌日、WTC近くにあるマリオットホテルで説明会が有るとのことで、ナント無謀にも、セントラル・パークからダウンタウンまでを歩くことにしたのである。好奇心も手伝い、しかもたった一人で！

兎にも角にも、南端へWTCを目指し、歩き始めた。中華街、黒人街を通り抜け、ただひたすらに、地図を片手に歩き続けたのである。

しばらく歩いたあと、110階建てのWTCが視界に入った時の安堵感は、今でも忘れない。後日談であるが、そのルートを通り抜けた事に、「無謀なことをする」と、驚かれたものである。「良く無事で！」と。

指定されたホテルに着くと、既に大勢の人々が集合しており、ホテル側の説明を待っていた。その後、WTC両ビルに挟まれた宿泊先NYVISTA HOTELへ、滞在時間制限のもと、荷物を取りに入室、やっと一息付き、帰国の途に着くことが出来た。

後日談であるが帰国後、同ホテルの支配人から丁寧な挨拶状が届いたことも記しておきたい。

今回のNY出張の目的は別の形で果たしたのであるが、帰国後、お客様への挨拶も含め、事後処理に忙殺された。

振り返って思うに、現在の私達は、否応なしに国際情勢の変化にさらされており、決して他岸の出来事ではないことを痛切に感じる。現在のWTCの跡地、グランドゼロ（爆心地）では、2013年完成を目指し、復興の槌音高く再開発が進んでいる、あの忌まわしい事件を打ち消すかのように。そして今も世界中でテロとの戦いは続いているが、二度とこのような悲劇が繰り返すことのないようにと祈り、筆を置くことにする。

In Tokyo

現役で頑張ってます

太陽と人工衛星

南高28回卒　杉本　俊夫

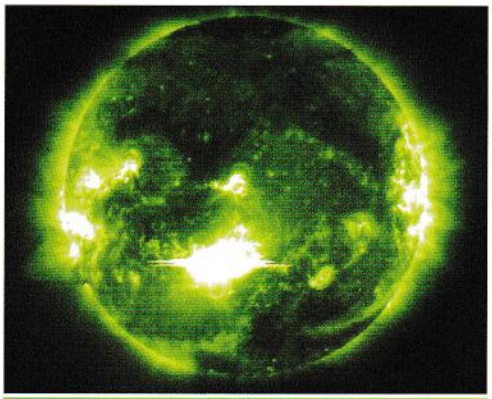
平成15年の10月のことである。過去25年で最大レベルの太陽フレア（大爆発）に遭遇した（添付画像を参照）。私は、その時人工衛星の軌道管理の仕事に従事していた。

その日は、いつもどおり太陽活動の状況を、海外、および国内のインターネット情報で分析していた。「Ⅱ型バースト発生」、続いて「Ⅳ型バースト発生」。地球に地磁気嵐を引き起こす現象が報告された。

地磁気嵐は、地球周回軌道の衛星高度を低下させ、また衛星と地上局間の通信障害を発生させるため、警戒していた現象である。X線等の電波は光の速さで伝達するため、発生から約8分で地球に到達する。実際に地磁気嵐を引き起こすのは、太陽の高エネルギー粒子線、太陽風じょう乱であり、さらに1日から2日を要する。

X線フラックスの強度は、X17・5と報告された。普段ではX1、X2でも大きな警報となるのに、とてつもない大きさである。太陽の放射線は、衛星の電子機器を貫通し、しばしば故障の原因となる。

七転八倒いろいろとありましたが、無事に難局を脱することができました。他の人工衛星においては太陽電池パドルが異常となり、電力を失っ



「太陽フレア画像」―出展―　SOHO[internet]; http://sohowww.nascom.nasa.gov/[accessed 2011-08-01]

たために、機能停止してしまったほどの大爆発であった。「太陽って、ほんとうに恐ろしい存在！」と実感したできごとであった。

特別寄稿

佐原が生んだ偉人・伊能忠敬

前伊能忠敬記念館長
南高15回卒　豊田　益男

佐原が生んだ偉人・伊能忠敬は、50歳を過ぎてから、日本全国を測量して歩き、日本最初の実測日本地図をつくりあげた人物です。記念館では、利根川水運で栄えた商都・佐原の発展の歴史、伊能家と忠敬の人生を年代順に追い、その業績の結晶である伊能図を紹介しています。また、実際に使われた測量器具や測量に関わるエピソードも併せて展示しています。

忠敬は、1745（延享2）年に上総の小関村（現・山武郡九十九里町小関）で誕生、1762（宝暦12）年に忠敬17歳で伊能家へ婿入り、1781（天明元）年に36歳で名主拝命と活躍していました。当時、佐原は利根川水運の拠点としてにぎわい、高瀬舟は川船としては日本最大級で、大型の者になると長さ29メートル、幅4メートル）ほどで、最大積載量は1200俵ほど（約72トン、約500石）で、20～30艘が佐原から江戸への物資流通として使われていました。忠敬は伊能家の当主として、腕を振るい財産を3倍くらいにふくらませ、1793（寛政5）年に忠敬48歳のとき関西旅行へ、1794（寛政6）年に忠敬49歳で隠居、家訓書をつくりました。1795（寛政7）年の忠敬50歳のとき、19歳年下の高橋至時（よしとき）の弟子となります。

そして、忠敬は子午線一度孤長＝28・2里を求める夢に向かって努力していきます（日食予測のため地球の子午線1度〈緯度1度〉の長さを測定し、地球の大きさを確定することが至時の願望でした）。

西日本測量を1816（文化13）年に終え、忠敬71歳で全国測量が終了します。1818（文政元）年に忠敬73歳で死去した後、1821（文政4）年に伊能図が完成します。

忠敬の測量ですが、地上測量を丹念に行って測量の誤差を小さくし、天体観測を地図づくりに応用しました。日中は地上の方位と距離を測量しました。測量器具は、弯窠羅鍼（わんからしん）といって、杖の先につけた方位磁石や半円方位盤（遠くの山や島までの方位を図る器具）、また象限儀（しょうげんぎ）（小）といって地図作成に必要な距離を求めるために坂の勾配の角度を測る器具です。量程車（りょうていしゃ）といって、車輪の回転で距離をあらわす器具で、測量の前半に使われました。

夜は、天体観測を行い、日中は日食も観測しました。同じく測量器具は、測蝕定分儀（そくしょくていぶんぎ）望遠鏡の筒に挿入して、日食・月食の進行状況を測定した器具で、象限儀の（中）は、北極星等の高度を測った器具です。他に、垂揺球儀（日食・月食の進行状況の時刻を測った振り子時計）と、観星鏡（木星の衛星などを観測した天体望遠鏡）があります。

伊能図は彩色した完成図であり、原則として忠敬が測量するたびに作られています。

縮尺により、小図（432000分の1）、中図（216000分の1）、大図（36000分の1）の三種類があり、記念館には第1次から第4次測量成果をまとめた東日本沿海図の大図が69枚すべて所蔵されております。その中の一部を展示しております。

幕府に提出したときの大図の控えであります。測線は針突法により朱で引かれ、その周囲の地形表現は細密に描かれています。地名のほか、領地の区別や領主名まで記入してあります。

色彩は淡彩です。針穴は裏打ちの紙を貫通しており、裏打ち後、紙の伸縮が安定した後に製図したことがうかがえます。また、余白に紙の寸法が銘記してあります。

全日本沿海輿地全図
（東京国立博物館蔵）

このように、忠敬が完成した伊能図、下図（原図）などの地図類をはじめ、測量器具や記録類、忠敬の孫忠誨（ただかい）の業績に関する資料も展示しています。伊能忠敬の業績と人間について御覧頂くとともに、忠敬に関する資料の保存に、伊能家をはじめ先人のご努力があったこと、各地の多くの人々の協力により完成したことを感じると思います。

最後に、2年間の伊能忠敬記念館勤務の中で、昨年の2010年6月29日に、「伊能忠敬関係資料」2345点の国宝指定や、「ゆめ半島千葉国体」時に、高円宮妃殿下の行幸啓ご訪問があり、街全体が活性化し、多くのイベントも行われました。

しかし、3月11日の東日本大震災により、国の史跡伊能忠敬旧宅はじめ、町並みも大きな被害となり、大変な状況となってしまいましたが、一歩一歩復旧・復興してきております。是非、多くの皆様にご来館頂きたく、伊能忠敬の業績の一部を紹介させて頂きました。

平成22年度総会

平成22年度の第9回総会は、平成22年10月9日(土)午後2時より、東京五反田の「ゆうぽうと」で盛大に開かれました。

第1部では「私の陶芸人生」という題で、陶芸家會田雄亮氏(二高2回)にご講演をいただきました。

第2部では、総会が開かれました。

総会次第

議事

1 平成21年度活動報告
2 平成21年度収支決算報告ならびに監査報告
3 平成22年度活動方針（案）
4 平成22度収支予算（案）
5 規約及び規程制定（案）
6 平成22年度役員改選
7 その他

第3部　懇親会

役員一同です。
よろしくお願い致します。

昨年の総会での講演

私と陶芸人生

二高2回　會田　雄亮　氏

本日は、私が今まで陶芸をやってきて、折に触れいろいろと感じたこと、出くわしたことを断片的ではありますが、お話し申し上げたいと思います。

私は南高を卒業していないんですね。はなはだ心細いですけど。疎開して入ったものですから。そういう人間としてお礼を申し上げなければなりません。7月の末から8月の初めにかけて、久しぶりに大沼デパートで個展をやらせていただきました。2004年に山形美術館で、北海道、山形、東京と巡回してやらせていただいたのですが、その時以来展覧会はなかったものですから、大沼でさせていただきました。佐藤会長さんや歴代の校長先生においでいただいたので、パーティはまるっきり山南同窓会みたいでした。「空はコバルト」でしたっけ、あれが出てくると感激いたしました。

練り込み

その時には、いろんな新しい「練り込み」の仕事を見ていただいたのですが、「練り込み」というのは、いろんな土に色を付けまして、それで層を作って模様を作るんです。描いてあるのではないんです。今日それを持ってきました。

なかなか口で言っても分からないものです。例えばこういうお皿があります。種も仕掛けもないです。これは全部で6色か7色の色を使っていますけど、色の土を、こういう風に重ねて積んでいくんです。ある厚みで。積んでいって、こういう厚みができたならば、これを倒して薄く切り、それで形を造るんです。コーヒー・カップを作ったり、お皿を作ったりするんです。

これは、もうちょっと複雑な模様を、色の付いた粘土を何色か重ねて、造っていくんですね。何度か切って、裏返しをして合わせたりして模様を作って、それをまた薄く切って、形を造るんです。これを「練り込み」と言うんです。ちょっと廻しますから、見てください。

私が展覧会をやっていますと、必ずお客さんに、初めからご説明するんです。これは土に色を付けて、それでいろんな模様を組んで、それを薄く切って形にするんだと。これは何種類使っているとか、これはもう50種類使っているとか説明いたします。説明が終わると、お客さんは感心して帰ってくださるのですが、帰り際に「大変ですね。こんなに丁寧に描くのは。」と言われるのです。ガックリ来るんですけどね。(笑い)こういう焼き物技術もあるということです。

「練り混み」と申しますと、皆さんにちょっと質問しますが、バームクーヘンというお菓子を知っていますか。それから金太郎飴も知っていますね。それから海苔巻きや箱根細工。これは「練り込み」なんです。要するに、みんな同じ兄弟の技法なんです。箱根細工は、木や竹を重ね合わせて接着し、それを薄く切って、模様に使うんですね。

バームクーヘンは、あのロールでもって焦げ目をつけて、それを輪切りにする。お菓子の技術ですね。金太郎飴は、ガラスのモザイクと一緒なんですが、大きく金太郎みたいな模様、顔かたちを作って、ガラスと同じように飴を伸ばすんです。

伸ばして、細かくすると、あの金太郎の顔が出てくるんです。それを焼き物でやると「練り込み」になるのです。簡単なものですから、お覚えいただければ、ありがたいと思います。

焼き物に入ったきっかけ

私が焼き物に入ったきっかけは、なんでもないのです。「この指止まれ」って自分に言ったんです。「焼き物やるヤツは、この指止まれ」と自分で指を出して、自分で捕まったのです。それで決めたんです。

大学で都市計画をやってました。非常に堅い分野ですから、卒業すれば都市計画課であるとか、お役所または造園業をやるとかとなるわけですが、学生の時から、自分の意思で、自分の力でやる仕事はないかと考えていました。自分の責任でやって一生過ごせる方法がないだろうかと悩んでいた。その悩みは、2年間続きました。2年間大学に余計に行きました。挙げ句の果てにぶつかったのが、焼き物なんです。その時に、焼き物ではなくて、凄い大工さんにぶつかっていれば、迷いなく宮大工になったでしょうし、あるいは豆腐屋さんをやったかもしれません。豆腐に凝って「練り込み豆腐」なんかをやったかもしれません(笑い)。これもよかったかもしれませんね。

買って貰える作品

焼き物もみんなが買ってくだされば暮らせるし、命も長らえる。買ってくれなかったら駄目なんですね。これが厳しいところでして。それには、どうしても良いもの、独自性のあるものを造らないといけないということです。人と同じことをやっていたら食えない。

展覧会なんかで見ていただいて「これ買ってやるよ」って言われたら、生計が立つんですよ。これが気持ちよくてね。そこでこれに決めた。

ところが、母方の祖母が、えらく怒りましてね。父親が死んで、いなかったものですから、一人で、大学を卒業して月給取って母親を助けないんだ。この憎たらしい孫が。」と言うんですよ。おばあちゃんにしてみれば、自分の娘が可愛いですから、「この極道者」となるわけです。家族会議みたいなものを開かれて、しょぼんとしていました。

そういうことで、焼き物の世界にとっかかりができ、宮之原謙という先生を非常に尊敬しまして、先生の仕事の下っぱたらきをさせてもらいました。ほとんど、水汲みと薪割りでしたね。それから外に出まして、少しずつ実力をつけてきたんです。

南高とのつながり

南高とのつながりは、二中時代に疎開をしたことです。終戦後は東京に帰って来たのですが、疎開ってどことなく肩身が狭いものでしてね。

千歳貞治郎にある日突然、「いまテレビに出ているのはおまえか。会いたいな。」って言われて、「んだ。」と自然にズーズー弁で答えました。ちょうどテレビのコーヒーのコマーシャルに出ていました。

南高にいたときの記憶は、農村動員に行っているか、開墾へ行っているかでした。蔵王の硫黄鉱山で開墾していたとき終戦の詔勅を聞いたわけです。その時一緒にいた二人が、ここにいますけどね(笑い)。その後は、南高とはしばらく縁はなかったんです。

千歳が電話をよこしたとき、「ああ、んだ。」と言って、また南高とのご縁ができたんです。それまでは、疎開して二中には入ったけど、山形は故郷であって、法事があったら行く、結婚式があったら行く所、つまり田舎だったんです。やっぱり中学生の仲間ができて、ぐっと緊密になるわけです。

そのときから、改めて山形との近づきが緊密になりました。最後は芸工大（東北芸術工科大学）の学長も頼まれて、一生懸命やりました。

そういうわけで、私は南高を卒業していませんけど、南高っていうのは、大変嬉しい母校なんです。

アメリカへ

私が最初に出かけたのは、アメリカです。アメリカってところは、決して焼き物が進んでいるところではありません。ご存じのように、焼き物は、当時は中国が一番進んでいた。あとはイスラムの国ですね。

日本は、大体は中国の伝統から、技術を学んでいたんです。ただ当時、世の中終戦で何もなかった時代ですから、自分としては、仲間たちに多少ましなデザインのものを作ることはできないか、それを提供できないか、それには少し武者修行をしなきゃならないだろうと、アメリカに行ったのです。

ただアメリカに行っても、楽じゃなかったんです。360円の時代ですからね。就職先を見つけなければいけない。全国の大学の陶芸科があるところを全部コピーしてきました。手書きでした。コピー機がありませんから。

百通手紙を書いたところ、幸いにいくつかの学校から「興味があると」いう返事をもらったのです。ボストン美術館に週3回の契約で参りました。

「3回では飯は食えないだろう。だけど、あなたの力であれば、大学の工房で作品を作り、それを売って暮らせるんではないか。」と言ってくれました。確かにその通りでした。

一人の女子学生

ひとつ、今もって感銘して忘れられないことがあるんです。

焼き物っていうのは、農家のご出身の方がいたら非常に失礼ですけど、百姓科学っていうんです。片っ端から克明に、1％ずつ配合を変えて、自分の色とか土を見つけるわけですね。その中で見つかったのが良い。それを繰り返すんですが、学生には初歩で、焼き物ってのはこういうもので、こういう成分があって、こういう粘土があって、こういう性質で、だから「最初易しいところから作

れよ。」と言うんです。

一人の彫刻の女子学生がいました。彼女は「私は、人間があぐらをかいた、等身大の焼き物を焼きたい。」と言いました。私は、「そんな馬鹿な。焼き物では初心者なんだから、もうちょっと基礎をやれ。」と言ったんです。そしたら、自分でこつこつ造り始めるんですよ。彫刻家ですから、粘土で像はできるんです。人間が座っている座像を造ったんです。でも、１週間、２週間たつうちに、どんどん切れていくんです。

粘土は乾燥すると収縮が違いますから、割れてくるんです。そんなこと知らないから、勝手に造って、割れても何でも、継いだりして、また造ると強引に焼くんですよ。水分を十分乾かしていない状態で焼くと、爆発しますので、こっちは、ハラハラしてね、「窯を壊すなよ。」って言うのですが、平気でやるんです。

案の定、「バーン」と爆発してしまい、窯の蓋を飛ばしてしまいました。何回も、「焼き物の基礎をやれ。」と言ったのですが、彼女の言った言葉は、I like it. でした。「私これが好きだ。」って言われたら、男女の仲と一緒ですからね。(笑い)誰も文句を言えません。「しょうがない。やってみろ。その代わり、もうちょっと、乾燥させろよ。」

とうとう１年半から２年ぐらいたちましたかね。何個目かを造ったんですが、これが割れないのですよ。焼く前に多少ヒビが入ってたんですけど。それがまた実に良いんですよ。味わい深いというか。少し形が曲がっていますが、I like it. と言って造ったやつですね。人の心を打つ迫力を持っているんです。

これには感心しましたね。そこで、何を考えたかと言いますと、アメリカって国は、独創的なものをやる国なんだ、日本は独創的じゃなくて、職人芸的に伝承していく社会なんだ。だから、これからの日本は、I like it. で行かないと難しい。これが大事だということでした。これがアメリカで非常に印象に残った出来事で、今でも学生に話をするんです。よくわかるでしょう、日本人と違うって。とにかく聞かないんですよ。「余計なことを言うな。」って顔なんです。

器のちから

ある時、ボストン美術館のところで日本の陶磁器展をやっていました。桃山の茶湯名品が出ていました。私はその頃、大学が許可したので、時間外に工房で物を造り、それを売って生計を立てていました。

アメリカで生計を立てる焼き物で、一番良い物はボール（碗）です。ちょうどお茶碗ぐらいの大きさです。どこの家庭でも、週末にはパーティをやり、お客さんを呼んで。ディップをつけたクラッカーとか、ピーナッツといったものをボールに入れて出すんです。どの家庭にも、質の上下は問わず、必ずあるもんです。そういうものを売っているショップなどに行きますと、当時で大体６ドルですね。１９６０年の話ですよ。随分昔の話です。今なら何倍もします。６ドルでその当時売ってましてね。

私は、そのとき、お茶の茶碗を造ろうと思ったのです。まったくのお茶の茶碗です。ご存じのように、お茶の茶碗というのは、少し大振りで、いろいろな変化があって、窯変があって、それから絵付けができるんですね。それを15ドルで売ることが出来るんです。倍以上で。

そうすると、向こうの連中は「日本人だから、その値段で売れるんだ。」というんです。「そうじゃない。やっぱり違うところが、いくつかあるんだ。たとえばあんたたちの造ったボールと、俺のボールを比べてみろよ。どこが違う？高台（こうだい）が違うんだよ。やっぱり、ディップを使うボールは、ただのボールなんだよ。」

皆さん、お家に帰って、床の間に、ただ湯飲み、そばちょこを置いてください。やっぱりこれ、立っていません。500円でも。

お土産展で買った物でも、お茶の茶碗ですと、置きますとちゃんと立つんです。やっぱり大きさと言い、高台の良さと言い、長年の習慣と伝統で出来た器のちからってあるんです。お茶の茶碗は、本来千利休が一番使い易い物を見つけてきてやったわけでしょう。だから、お茶碗は一番使い易い器なんですよ。帝国茶碗で冷や奴を食ったり、はえぐすりの夏茶碗で白菜の漬け物をいっぱい天こ盛りしたりして食べるのが美味いんです。そこに日本の焼き物の伝統美があって、アメリカと違うところなんです。何で違うのか。帰ったら、床の間で実験してみてください。

その時、日本のお茶碗が１個300ドルというのが出たんです。60年ですよ。学生も先生も、「ただのボールだろう。何でそれが300ドルなんだ。」と言うんです。ぼくは「良ければ300万円（ドルでない）でも良いじゃないか。中身や質の問題だ。駄目な茶碗は300万では高い。だけどあの茶碗は立派だからね。300万。別に文句ないんじゃないの。」と言いました。だけど、大概のアメリカ人は「あれはボールだろう。彫刻や絵と違うだろう。絵画や彫刻と違う。ボールじゃないか。ボールに300万は奇想天外で、ふとどきだ。」と言うんです。

「我々日本人は、建築だろうが、絵画だろうが、工芸だろうが、彫刻だろうが、同じもの、同じレベルとして見る習慣がある。だからお茶碗がひとつ300万だろうが、500万だろうが、１千万だろうが、それだけの質があって、人を打つ物であれば、ちっとも問題ない。」と私は言いました。

皆さんもそうでしょう？彼らは「彫刻は高いんだ。」と思っている。下手な野暮の彫刻でも。ぼくは下手な彫刻は素晴らしい椅子より劣ると思っているんです。出来の悪い彫刻はね。だけど、アメリカとヨーロッパでは、彫刻、絵画はファインアート、つまり芸術で、工芸はクラフト。クラフトは、日常使う物で、価値がひとつ落ちていると

考えるんです。これは物に対する差別なんです。

私ども日本人は、そういう感覚を持たなかった。今でも持っていない。ただ最近多少それが出て来ています。伝統工芸とかなんとか。こっちの方が芸術だと思っている人が多くて困るんですが。やっぱり日本人は、伝統的に絵画、彫刻、工芸を一緒に見て評価する習慣があった。素晴らしいことなんです。日本人の感性なんですね。その日本人の感性ってどこから出て来たか。

床の間

私は、ひとつは床の間だと思うんです。われわれの暮らしに、必ず日本画があった。日本建築には当然です。

今でも私の東京の家は、2階は全部畳です。畳の上に布団を敷いて寝るのです。アメリカにいたとき、イヤっと言う程ベッドに寝ましたから、もう今さらベッドは厭でした。ただ何年か前に、腰の手術をした際、ベッドじゃなきゃ駄目だということになりましたけど。(笑い)まだ、頑張って畳の上に煎餅布団を敷いて寝ているんです。

それで、床の間がだんだん無くなってきて、大変残念なのです。建築家のみんなと一緒に、「これから、床の間に補助金をつける運動をやろう。」って言っています。世界でも、こういう床の間のようなギャラリーを持っている民族は、どこにもいないんです。

ご存じのように、床の間っていうのは、生まれたときのお祝いもするし、端午の節句でも、三月の節句でもやる。それからお正月の飾りもやる。昔はそこでお葬式もやりました。そこに季節の花を飾り、季節の軸を掛けて、季節の香炉なり何なりを置く。置く物を組み合わせるハーモニーを自分なりに考えて置くわけです。これが大事なんです。ですから床の間っていうのは、単に伝統的にあるスペースではなくて、やっぱり素晴らしい芸術の創作性、感性を磨く場所なんです。それをぜひ、もっともっと普及させたい。ただ残念ながら、いま無くなる一方なんです。それについては、ぜひ補助金を出すようにしてもらいたい。

シルクロードと違う物と文化の流れ

時間がなくなりましたが、最後にシルクロードの話をします。シルクロードは、皆さんNHKテレビなどで見て、憧れの場所ですよね。すべての文化は、日本ではシルクロードを通って来たということになっています。ですから焼き物もそうだと思われている。すべて唐時代に、ラクダの背中に乗って、最後には日本のはずれまで来て、日本で止まった。そして日本の文化が開けたという考え方です。

焼き物について考えてみましょう。ラクダで何個持ってこられますかね。ラクダが背中にいっぱいしょったって、茶碗を百個は持てないでしょう。シルクロードだけを考えては駄目なのです。日本人はコースを決めますと、それ1本になっちゃう。いろんな組織もそうです。官僚組織でも、政治の組織でも、ひとつの仕組みが出来ると右倣えして、全部一緒になってしまう。こんな危ないことない。

私は、東南アジアにも大変興味を持ちました。日本の焼き物は、17世紀に有田などが飛躍的に、世界的に有名になった。そのきっかけは、中国で明の末期に政変が起き、国が荒廃して、焼き物の輸出を止めたのです。そのピンチヒッターとして、日本の有田や、ベトナムの焼き物が、ヨーロッパにたくさん出たんです。それで技術が飛躍的に向上して、金儲けも出来たんです。

中国の焼き物がストップされるとどうなるかというと、密貿易が始まる。中国で出来た物が、ベトナムを通ってインドシナ半島に出て、それから船に乗ってインドネシアとか、ルソンに行くわけです。当時ベトナムとインドネシアとフィリピンは、非常にお金も持っていたので、物が流れて来るわけです。要するに、お金があるところに回ってくるんです。だからバブルの時は、全部日本に来た。今は中国に行っています。

シルクロードって確かに文化が伝わってきたところだけど、物の文化っていうのは、海岸を通ってきた。そこで学者は「海のシルクロード」という説を立てるんです。海岸を通って日本に来たと。

焼き物は、船のバランスを取るため、船の一番底に重しとして置かれました。最近は近海の沈没船がたくさん発見されましたが、それによりますと、素晴らしい中国の染め付けも、一旦インドネシアに行くんです。インドネシアからルソン、フィリピンを通って沖縄に来て、日本に来た。こういう道があることが分かって来た。

ぼくもベトナムの焼き物が大変好きなのですが、中国の伝統とか中国のスタイルを8割方真似しているんです。だけどあと2割がベトナムのものなんです。ですから中国と全く違う染め付けができるんです。しかも、国内用と輸出用に、ちゃんと分けているんです。東南アジアで普及して、日本に渡っている物は、ほとんど輸出用に造られた染め付けです。

焼き物は、イスラムから、海岸を通り、インドネシアのセレベス島に渡り、そこからルソン島を通り、沖縄を通って日本にまで渡って来た。

これは物流ですよ。物が辿って来た道であるけれども、同時に文化が伝わって来た道でもあるんです。シルクロードとどっちが強いか。それが私の言いたいところなんです。

シルクロードは確かに素晴らしいところを通ってきているし、NHKの放送を見ていると惚れ込みますけれども、本当は物の流れこそが、文化の流れではないかということが、私が痛切に感じていることなんです。

もっともっとたくさん、話したいことがありますけれども、時間が来ましたので、これで終わらせていただきます。ありがとうございました。

(拍手)　(33分)　　(文責：小松栄三郎)

◆會田雄亮（あいだゆうすけ）氏略歴

（ウィキペディアより抜粋）

1931年、東京都に生まれる。1956年千葉大学都市計画学科卒。ボストン美術館附属美術学校講師。Bennington Potters Co.にチーフデザイナーとして勤務。1968年、イタリアのファエンツア国際陶芸コンペで金賞受賞（キャセロール作品）。1972～1976日本デザイナークラフトマン協会理事長を、1976～1979社団法人日本クラフトデザイン協会理事長、1986～1990通産省（当時）デザイン奨励審議会委員を歴任。1991年社団法人日本建築美術工芸協会理事、1992年東北芸術工科大学芸術学部教授。1993年デザイン功労賞を受賞。1998～2002東北芸術工科大学学長。2002年東北芸術工科大学名誉教授。2006年愛知県立芸術大学客員教授。山南東京同窓会顧問。

著者紹介

南高15回卒　鈴木　隆氏

『渡辺多満の生涯』

（タングラム・3990円）

慈善事業・社会事業・教育事業に生涯を捧げた一人の女性の伝記。21年の歳月をかけて資料を精査した労作。

『ライフワーク発見法』

（三省堂・1700円）

10年間で、2500人を取材し、ライフワーク人間を「二足のワラジ人（びと）」と定義し、森鴎外型、菊池寛型、夏目漱石型の3つに分類した。ユニークな発想で、ライフワークを持とうと呼びかけている。残念なのは品切れ。

鈴木氏は、横浜をこよなく愛し、「横浜学」を提唱し、市民と共に横浜の魅力を語ってきた。

また14年前、漱石の『吾輩は猫である』に、14世紀の英国の古典から3箇所引用されたことを発見し、『東京新聞』1面トップで報じられたこともある。

昨年の総会で、卒業後初めて再会し、旧交を温めることができた。エネルギッシュな性格は、全然変わっていなかった。（小松栄三郎　記）

平成22年度 物故者

平成22年9月3日以降
23年9月24日判明分まで

（旧職員）

平成23・6・18　五十嵐秀男　先生　保体（S54・4～61・3）
平成23・9・24　木野　千里　先生　社会（S39・4～55・3）

（同窓会員）

［二中卒］
2・3回卒　小池　清晃　22・11・12
4回卒　漆山　和夫　22・9・1
4回卒　黒田　三郎　22・12・31
4回卒　斎藤　辰芳　23・2・25
4回卒　中山　祐助　23・1・4

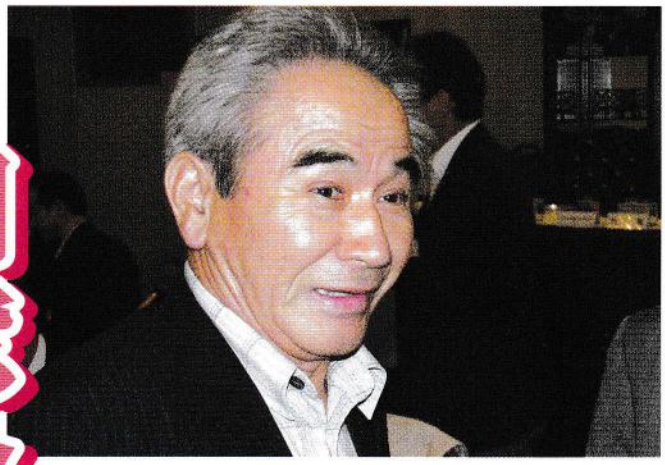
［二高卒］
2回卒　朝倉　卓治　22・10・5
2回卒　枡田　圭児　22・10・9

［南高卒］
1回卒　石沢　行夫　23・5・6
1回卒　木野　千里　23・9・24
1回卒　鈴木　輝雄　23・7・9
1回卒　高橋　祐吉　23・1・20
1回卒　松田　實　23・3・18
1回卒　宮川　敏彦　22・10・20
2回卒　加藤　伸　22・10・4
2回卒　山川　秀雄　22・5・29
3回卒　工藤　忠　23・4
3回卒　中井川秀男　22・9・7
3回卒　中村　敦子　23・8
3回卒　藤井千代子　23・2・12
3回卒　前田　二郎　22・10・19
6回卒　安孫子　浩　23・5・17
6回卒　西塔　恒義　22・9・24
6回卒　鈴木　修　22・8・5
6回卒　田中　一三　23・9・18
6回卒　橋戸　アサ　23・9・16
7回卒　阿部　孝　23・3・10
7回卒　佐藤　正征　22・7・26
7回卒　中川　剛　23・2・17
7回卒　三浦　正三　23・8・4
8回卒　伊藤　忠　23・4・27
8回卒　遠藤　雪子　22・5
8回卒　今野　将　22・8・24
8回卒　渡邉　政　23・5・22
9回卒　大坂　幸雄　22・11・9
9回卒　増田　耕一　22・1・12
10回卒　鈴木　正敏　22・10・19
10回卒　原田　孝史　23・5
11回卒　秋保　武　23・4・23
12回卒　大崎　勝弘　23・6・2
12回卒　真壁　信政　22・11・30
14回卒　菅井　悠武　23・6・1
14回卒　矢萩　節　23・4
14回卒　東海林成多　22
15回卒　井上　義昭　23・5・12
15回卒　白田　寧　22・9・22
16回卒　伊藤　俊一　23・2・2
16回卒　猿橋　則男　22・2・5
20回卒　升谷　順一　23・9・8
23回卒　岩井　秀之　23・4・26
24回卒　矢矧　博夫　22・8・9
33回卒　安達　裕之　22・10
54回卒　安達亮太郎　23・5・12
現役2年生　井上　陽太　23・5・12

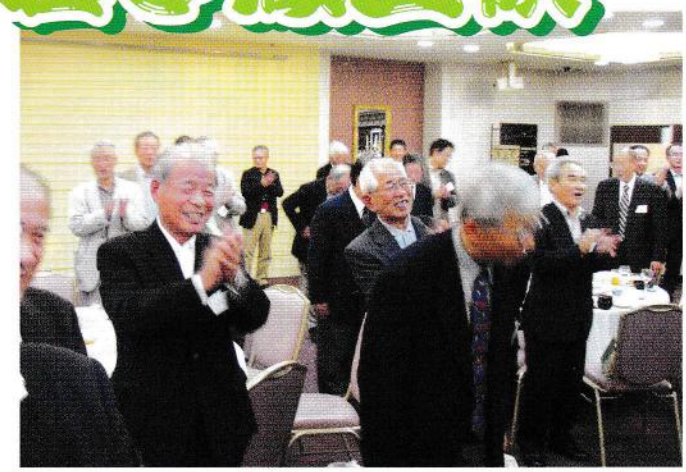
我ら一堂に会す

想い出すあの日あの時

同窓会と共に歩んだ仲間たち



ひんがしに　碧き蔵王嶺



山形南高東京同窓会　平成２２年度　収支決算書

一般会計

＜収入＞　（単位：　円）

項　目	H22予算額	H22決算額	比較増減	摘　要
総会会費	905,000	692,000	-213,000	
年会費	780,000	664,000	-116,000	
寄付金	70,000	70,000	0	総会来賓祝金
広告協賛	130,000	120,000	-10,000	
雑収入	0	355	355	預金利子
前期繰越金	317,055	317,055	0	
収入合計	2,202,055	1,863,410	-338,645	

＜支出＞　（単位：　円）

項　目	H22予算額	H22決算額	比較増減	摘　要
会場使用料	30,000	0	-30,000	
懇親会経費	850,000	742,668	-107,332	
会議費	130,000	126,525	-3,475	役員会、学年幹事会の会場料、弁当代等
総会案内経費	280,000	273,693	-6,307	
議案書印刷経費	180,000	192,885	12,885	
事務費	110,000	113,948	3,948	消耗品代、郵送運搬費、通信費等
東京同窓会会報	250,000	216,340	-33,660	
ホームページ制作費	60,000	0	-60,000	
活動費	120,000	167,580	47,580	
予備費	192,055	20,000	-172,055	
支出合計	2,202,055	1,853,639	-348,416	

次年度繰越	0	9,771	9,771

特別積立金会計

＜収入＞　（単位：　円）

項　目	H22予算額	H22決算額	比較増減	摘　要
前期繰越金	620,000	620,000	0	
収入合計	620,000	620,000	0	

＜支出＞　（単位：　円）

項　目	H22予算額	H22決算額	比較増減	摘　要
寄付用テント	0	158,340	158,340	
支出合計	0	158,340	158,340	

次年度繰越	620,000	461,660	-158,340

22年度役員紹介

会長　斎藤常男（南高5回）
副会長　山田勲（南高8回）
副会長　小原征四朗（南高9回）
監事　石垣丘志（南高9回）
監事　高橋英也（南高9回）
常任顧問　浅黄優喜（南高4回）
顧問　會田雄亮（二高2回）
顧問　森谷享（南高1回）
顧問　土屋裕司（南高2回）
常任幹事　早坂仁作（南高7回）
常任幹事　平澤一宏（南高10回）
常任幹事　有海豊（南高11回）
常任幹事　佐藤守彦（南高14回）
常任幹事　小松栄三郎（南高15回）
常任幹事　滝口成一（南高15回）
常任幹事　鈴木淳一（南高25回）
常任幹事　村岡登（南高25回）
常任幹事　杉本俊夫（南高28回）
常任幹事　相馬和弘（南高28回）
常任幹事　我孫子雅敏（南高29回）
常任幹事　西宮忍（南高33回）
常任幹事　笠原健（南高34回）
常任幹事　山田健嗣（南高36回）

新URL ホームページのご案内

平成20年２月に正式公開
新ホームページ　平成23年６月に公開
（旧ホームページは平成23年12月31日で終了）

URL:http://yamanan.jp

ＨＰの主担当者：村岡　登氏（南高25回）

来年の原稿募集

７００字前後。写真も可。
原稿〆切　24年8月31日。
メールでの寄稿歓迎。
eizaburou@mug.biglobe.ne.jp
〒286-0011 成田市玉造4-34-2
小松栄三郎まで

お世話になります！ 東京事務所の南高卒業生

石山　清和（南高32回卒）
佐竹　良一（南高32回卒）
武田　広幸（南高34回卒）
飯野　典朗（南高39回卒）
鈴木　孝幸（南高39回卒）
漆山　敬人（南高44回卒）
黒田　敏弘（南高44回卒）

母校の進学状況（22年度末）

国公立大学【195名】		私立大学【243名】	
東京大学	1名	早稲田大学	2名
東北大学	12名	明治大学	16名
山形大学	62名	中央大学	21名
新潟大学	28名	東北学院大学	21名
		青山学院大学	9名
		駒澤大学	11名
		芝浦工大	12名
		東京理科大学	8名
		日本大学	17名
		法政大学	17名
		専修大学	15名

23年度 母校の運動部・文化部の活躍

◆運動部（県総体）

バスケットボール　優勝
ボクシング　優勝
レスリング（個人）　優勝
陸上（5千メートル競歩）　2位
水泳（団体）　2位
ソフトテニス（団体）　2位
レスリング（団体）　2位
バドミントン（ダブルス）　2位
バレーボール　3位
ラグビー　3位
硬式テニス（団体）　3位

編集後記

今回は、一般の投稿原稿がやや少なかったと思います。次号では多くの方々に寄稿していただくべく、会報上で原稿を募集することにしました。ぜひ奮って寄稿してください。メールでの寄稿も歓迎いたします。

★今号では、昨年の総会で講演してくださった會田雄亮氏のご講演内容を掲載しました。また、前伊能忠敬記念館長の豊田益男氏（15回卒）に特別寄稿をしていただきました。

★伊能忠敬は、地球の地図を作りました。杉本俊夫氏（28回卒）は、太陽の活動について書かれました。偶然地球と太陽の記事が掲載されたことに、少し驚きました。

★著書を著しておられる同窓会員も多いと思われます。「著者紹介」で鈴木　隆氏（15回卒）をご紹介しました。

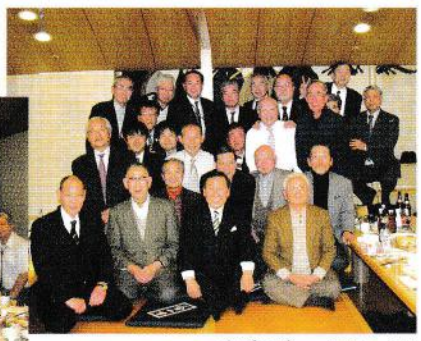
★ホームページのＵＲＬが新しくなりました。滝口成一氏（15回卒）から村岡　登氏（25回卒）に担当がバトンタッチされました。滝口氏はホームページを立ち上げ、内容の充実化に鋭意取り組んでくださいました。

★学年幹事であられた藤井千代子氏（3回卒）が急逝されたことは、まだ信じられません。心から哀悼の意を表したいと思います。

＊編集委員＊

小松栄三郎（南高15回）
滝口　成一（南高15回）
村岡　　登（南高25回）
杉本　俊夫（南高28回）
相馬　和弘（南高28回）

夏の懇親会　23.6.27



新年会　23.1.28